



校長室だより

新学期が始まって一か月が経とうとしています。学校全体を見るとなんとか4月を無事に終えることができそうです。無事に過ぎたら良いわけではなく、子どもたちにとって「がんばろう」と思える一か月になってほしいなと思っています。

子どもたちの思いはもちろんそれぞれ違います。「がんばろう」という意欲の裏にある「友だちと上手くつきあえるのだろうか」「学習についていけるのだろうか」という不安をしっかりと聞いてあげようと担任は思っています。一方でこの4月はしなければならぬことが山のようにあります。学級担任はその中で子どもとの対話の時間をなんとかつくろうと四苦八苦しています。

子どもが自己決定する大切さ

主体性を育てるということを学校として意識していこうと話合っています。各行事や授業において何を子どもたちに委ねていくのかを考えています。すべてを子どもに任せるというわけにはいかない部分があるので各担当や部会で検討していこうとしています。今の学校はどうしても「やらせる」ことが多くなっています。教師や大人がやらせることは、子どもたちにとっては「やらされる」ことになります。すると子どもたちは上手いかなかったり、思い通りいかなかったりしたときに、やらされた教師や大人に原因をもとめるようになります。「先生のせいで」「お母さんのせいで」となってしまいます。人のせいにすることで自分事として考えることをしなくなります。すると自分で解決しようとしなくなり、教師や大人に頼ることになります。もちろん、頼ることは悪いことではないのですが、何事にも当事者意識をもたない子どもに育ててしまうのではないかと考えています。

先日、休み時間から帰ってきた子どもに「〇〇さんにボールとぶつけられた」と教えられたのでボールをぶつけたであろう人に話を聞いていました。するとはじめに教えてくれた子どもが教室に帰ろうとするのです。「ちょっと、まって。なんで帰るの?」と聞くと「きょとん」とした顔で戻ってきました。おそらく校長先生が注意してくれるからもう終わったと思ったのでしょう。自分で問題を解決しようと思っていなかったのです。逆にいうと自分で解決しようと思える子どもの主体性を育てていないと反省することになりました。

登校をしぶっている子どもにも「自己決定」を

わが子が保育園にいらっているときに登園をしぶって困ったことがありました。そのときに「今日は、どっちのくつからはく?」と自分で決めさせるということを先生から教わりました。3~4歳児は自分で決めたことをしっかりやりきる力がある「ほこり高き4歳」なのだそうです。

さて、登校をしぶっている子どもに対して、特に高学年では「自分で登校するかしないかを決める」ことを大切にしています。そしてどちらの選択をしてもその自己決定したことがすばらしいことだと学校でもお家でも言うようにしています。もしかしたら、これまで自分で決められないような環境にあったのかもしれませんが。大人が決めてしまったり、すぐに決めるのに苦労したりしていたのかもしれませんが。だからこそ自分で決めることを大切にされた方がよいなと作戦会議で相談しています。もちろん、何でも好きなように自分で決めたことだけで生活できるわけではありません。親の思いや考えを子どもに伝えながら子どもの声を聴いて、対話しながら決めていくという土台も必要です。自己決定をして自分の事は自分で解決しようという当事者意識をもって、主体的に生活していくことが必要だと思っています。